

論文審査の要旨及び担当者

論文題名

王朝物語の終焉——『いはでしのぶ』

論文審査の要旨

『いはでしのぶ物語』全八巻は、『竹取物語』(九世紀末成立)から『源氏物語』(寛弘五年(一〇〇八)以降まもなく成立)、そして『狭衣物語』(十一世紀末成立)へと続く平安朝物語文学史の、その掉尾を飾るテキストである。物語文学というジャンルの生成運動は平安時代で終わったのではなく、鎌倉時代の承久の乱(一二二一年)以降の衰退した貴族社会にあっても大量生産され続け、後嵯峨朝院政期(一二四六～七二)という隆盛期を迎えることになる。『いはでしのぶ』はこの期を代表する物語である。本論文の目次は以下のとおり。

序論

第Ⅰ部「見ること」「似ること」

- 第一章 一品宮—物語世界の座標
- 第二章 二位中将—再現する者
- 第三章 右大将—相似からの脱出

第Ⅱ部「手紙」

- 第一章 二位中将—手紙と仲立ち
- 第二章 右大将—筋書きの選択と手習

第Ⅲ部「音楽」

- 第一章 琴の琴—一品宮との「合わせ」
- 第二章 右大将の笛—異分子の音

第Ⅳ部「密通」

- 第一章 一品宮の密通—反発と受容
- 第二章 連関する密通—もたらされる赦し

補遺 『いはでしのぶ』前後

- 第一章 「まもる」が見出す縁と絆—『源氏物語』を起点として
- 第二章 報いの系譜—『恋路ゆかしき大将』

結論

本論文では『いはでしのぶ』の基本構造を次のように捉える。前半部(巻一～四)を「不婚の皇女」一品宮の聖性回復の物語であるとし、後半部(巻五～八)はそのような一品宮中心世界か

ら離反する者たちの物語であるとする。まず白河院皇女一品宮が、白河院系と対立する一条院遺子内大臣と、その意に反して結婚せざるを得なかったところから物語が始まる点に着目している。一品宮と内大臣との密通事件があり―物語前史に属す―、この一度は汚された皇女の聖性が、いかなるかたちで回復されるのかの物語として以下解説されていく。夫内大臣が一品宮の父白河院の逆鱗に触れたことで、この夫婦は引き裂かれ、その痛手で内大臣が悶死すること、そして二人の間の子がいずれ即位することで白河院系に一条院系が吸収されるかたちで両統が融和すること、さらには一品宮が最終的に女院の地位へ上ること皇女の聖性は異なるかたちで回復されていること、これら一連の物語展開が詳細に跡づけられている。後半部はその一品宮世界からはじきだされた人々についての物語であるとし、彼らの在り方がこれまで築きあげてきた一品宮世界を無効にする可能性を孕んでいるという。『いはでしのぶ』を以上のように理解した研究者はこれまでなく、難解な本物語の全体構造を見事に論じきったものとして高く評価される。

第Ⅰ部「見ること」「似ること」では、一品宮の以上のような聖性を、「喩」という観点から論じている。「碁」や「氷」は、それを取り巻く人間関係の何たるかを現前させるモチーフとして、『うつほ物語』『源氏物語』『狭衣物語』等に頻出するが、本論文はこれらプレテクストとの引用関係を検証しつつ、本物語が「溶けない氷」というパラドキシカルな喩表現を立ち上げていることをいう。何があろうとも永遠に自己同一的な聖女であり続けんとする意味がそこに含意されているとする。そしてこの一品宮が「美の基準」「相似の基準」として物語世界の中心におかれ、彼女と「似る」人物たちからなる麗しい世界がここに構築されんとしているという。その際に二位中将なるものの機能に本論文はとくに注目している。二位中将は、一品宮中心世界の確立に奔走する調停者・仲介者の役割を担う存在であり、かつこの世界を「見る」「まもる」人でもあるという。一品宮と内大臣の夫婦関係を側近く見守り、二人が絶縁するとその関係修復に尽力し、さらには内大臣を「まもる」ことで、当の大臣その人に限りなく同化していく。一方で物語後半部にあつては、右大将(二位中将息)と宰相中将とがともに手を携えて吉野に出奔するにいたることの意味を論じており、彼らは一品宮と「似る」ことのできなかつた異分子だと位置づける。

第Ⅱ部「手紙」と第Ⅲ部「音楽」は、『いはでしのぶ』の以上の物語構造を、「手紙」「手習」、そして「琴(きん)(七絃琴。平安時代に絶えていた聖楽器)」「笛」等のモチーフ論的観点から捉えたものである。これらも「碁」「氷」と同様に物語文学における馴染のモチーフ群であり、先行物語の表現を踏まえながら、本物語ではそれをどのように機能させているかを論じている。物語前半では、手紙は内大臣・一品宮夫婦のディスコミュニケーションを象るモチーフとしてあり、また仲介者二位中将はその夫婦間の手紙を利用することによって、夫婦関係の修復を図り、さらには手紙によりそうかたちで内大臣への同化をはたしているとする。一方後半では、右大将の手習が宰相中将に発見されるという展開に注目し、これが男の手習に男が返歌するという他に例をみない特異な方法であることを指摘するとともに、そのことが男二人の吉野行きという物語の異例なゴールを必然化させているとする。また音楽についての論では、一品宮の琴の奏法は白河院系の奏法を引き継ぐと同時に、一条院系の奏法を夫内大臣から盗み取ったものでもあり、それらをまるごと伝授された彼ら夫婦の若君が即位することで、両統の融和が琴

を媒介に実現しているという。また笛については、吉野へと脱出する後半の主人公右大将の笛の音が、「異分子の音」であるとし、また彼が都に残しとどめたその笛は、一品宮中心世界から排除されるにいたった右大将自身、さらには故内大臣たちを鎮魂するためのものとする。

第Ⅳ部「密通」は、『いはでしのぶ』に多発する密通事件の特性を、他の物語文学の密通というモチーフと比較して捉える。『いはでしのぶ』の密通は『源氏物語』等の密通とは異なり、長年にわたる家同士の系譜・系図上の対立関係を結果的には調和させるべく機能しているとする。確かに内大臣と一品宮との密通事件は、最終的には白河院系と一条院系という対立する皇統同士を融和させており、これは密通は罪であるとする常識的物語文学論を転倒させるような瞠目すべき結論である。また『いはでしのぶ』と同時期成立の『我が身にたどる姫君』にも一品宮密通事件があることから、両物語の対応関係にも言及している。

さらに「補遺」の二本も大変有意義な研究である。第一章では「見る」「まもる」という行為が物語文学史においてどう位置づけられてきたかを論じている。「見る」ことの呪性という古代論理を始原におきつつ、その後の物語文学史において、「見る」「まもる」がいかに変遷し、物語の人間関係を築きあげるに参与しているかを論じており、『源氏物語』を経由して『いはでしのぶ』にいたる長大な物語文学史の流れを総括している。第Ⅰ部第二章において、二位中将の「まもる」という行為に本論文は着眼することから始めていたわけであり、そのことの意味を物語史的に俯瞰した論である。『源氏物語』の「まもる」は見えない人間関係を発見する質のものだったが、『いはでしのぶ』になると、それまで存在し得なかった絆までもそこに仮構するにいたっているという。補論第二章は、『恋路ゆかしき大将』という『いはでしのぶ』のさらなる影響をうけた物語を俎上にのせて、「雛屋」というドールハウスに塗り込められた何世代にもわたる人間関係の何たるかを摘出している好論である。

そもそもこの『いはでしのぶ』ははなはだ厄介な物語である。全八巻の長編物語であるが、全文残るのは巻一・二のみであり、巻四は部分であり、全巻から歌のある箇所だけを抄出した本文が残る—この残存部分だけでもかなりの分量である—。この本文上の不備が研究上の障害となっており、本文批判を重ねながらの地道な解説作業が要求される。さらに『源氏物語』『狭衣物語』からの多量な引用で織りなされたテキストであるため、これらプレテキストとの差異と同一性を弁別すべく、論者は平安朝物語文学全体に通暁していなくてはならない。この物語の重要性を誰しもが認めつつも、なかなか正面から論じ得ない物語なのであった。それでも近時いくつかの優れた論文や注釈書が登場するようにもなった。しかし毛利氏の本論文が研究史上もっとも体系的なものであり、かつ本物語の文学史的な位置づけにも成功している。

本論文が『いはでしのぶ』研究というにとどまらず、「王朝物語の終焉」と銘打たれていることも意味深長である。密通により汚された一品宮は純粹無垢な不婚の聖女たり得ずして登場しており、だからこそ彼女は失われた王朝時代の喩なのである。そして物語は幾世代にもわたる長い時間をかけて、その一品の宮の聖性を回復し、それを要に据えた王朝世界を築きあげんとしている点に、鎌倉時代の貴族社会の共同幻想がもの見事に表現されていることになる。物語後半ではこの世界から疎外され、決別する者たちまでも現れているが、このような彼らの在り方が温室のように均質な一品宮世界に風穴をあけており、この世界を相対化するような地平を最後にみせてもいる。いわば失われた王朝世界を渴望しつつも、新しい時代の当来をも予感

せざるを得ないとする微妙な立ち位置にこの物語はおかれており、だからこそ「王朝物語の終焉」なのである。

不備の点がないわけではない。一品宮物語というのなら、『我が身にたどる姫君』との関係以上に、プレテクストとして『狭衣物語』をもっと重視すべきではなかったものか。『狭衣物語』では主人公狭衣と一品宮との結婚は兩人にとって不本意なものとしてあり、一品宮の出家と死という悲惨な結末を迎えていた。なぜ『狭衣物語』の一品宮物語がこのような物語としてあるのか、それだけでも一つの問題だが、『いはでしのぶ』はかかる『狭衣物語』の結末を批判することから構想されているのは明らかである。双方の一品宮物語ではともに「噂」が重要な役割を果たしている点も重要である。噂が立ったために狭衣は一品宮とは結婚せざるを得なくなるし、一方内大臣は噂によって一品宮との離縁を強いられて悶死するにいたる。

そしてもう一つ「王朝物語の終焉」を掲げるからには、『いはでしのぶ』と同時期に成立した他の物語との比較があってしかるべきである。もちろん本論文でも、長編物語『我が身にたどる姫君』について触れており、それなりの結論をだしている。しかし、一品宮物語だけに焦点を合わせるのではなく、『我が身にたどる姫君』と『いはでしのぶ』とにみる世界観の根源的相違を考えるべきである。この『我が身にたどる姫君』も何世代にもわたる貴族社会の系譜的構造を問題としており、『いはでしのぶ』と同様に故院系と水尾院系という両統が並立し、数多の密通事件を構えている。さらには皇后宮系と中宮系という女同士の根深い対立関係までもが敷設されてもいる。この『我が身にたどる姫君』も鎌倉時代の貴族社会が幻想したもう一つの王朝であるに相違なく、にもかかわらず『いはでしのぶ』の世界観は重なりつつも決定的に異なっているものと思われる。それを明確化することで、「王朝物語の終焉」なるものもより厚みのあるものとして定位されることであろう。

幾つかの課題は残るが、本論文は平安・鎌倉時代の物語文学研究を進展させる画期的なものであり、本論文の登場によって研究は新たな段階に入るものと確信される。以上により、本論文が博士（日本語日本文学）の学位にふさわしい業績であることを審査員全員一致で承認した次第である。

論文審査主査	神田 龍身	教授
	鈴木 健一	教授
	横 溝 博	大学特別非常勤講師
		(東北大学大学院 教授)